

平成 21 年度 甲州市観光振興計画策定委員会議事録

日時：平成 21 年 11 月 17 日（火） 午後 1 時 30 分～

場所：甲州市大和ふるさと会館 2 階会議室

1. 開会（省略）
2. 委員長あいさつ

午前中の市内視察において、委員の方々と車の中で一緒に話すことができた。全国レベルで見ても十分評価されているような価値あるものを、一緒に見ることができ、よかったと思う。

事前に送っていただいた資料を見させていただいたうえで、これからの取り組む姿勢と方針について整理しておきたい。

委員の皆さんと行政と調査機関の山梨総研と一緒にあって良い仕事をしていきたい。計画が絵に描いた餅に終わらないようにと何人かの委員の方から話があったが、良い仕事というのは、前向きで将来にかけて夢のある、そして実現したくなるというものである。

事前に配布された「課題と論点整理」を見ると、皆さん本当に良いことを言っている。住民の方がどのようなことを考えているかと、その共通認識を基に新たな意義ある変化をつけていくのが、この委員会だと思う。関係性やつながりを見つけていって、なるほどと共感される計画書になればと願う。

こうした観光計画は、委員会で発言してもそれがほとんど実行されない、という意見もある。観光などは総合産業なので、地域の底力や観光まちづくりということで実践しないと意味がない。住民や行政、企業などの役割分担をはっきりさせて、事業の優先順位や達成年度なども考え、また計画後の進行管理をする組織をつくって管理していけば、これから作ったものが価値あるものになり、実現すると思う。

行政がやるものだけでなく、住民が明日からでもやりたい、あるいは企業としてやっていく、というものがあれば、すぐに取り組んでいく。これから資料の説明がなされるが、観光課だけの事業が網羅されている。グリーンツーリズムやワインツーリズム、資料の中にもある「あるーくこうしゅう」等、これらはホームページ（以下HP）で見ても、非常に素晴らしいと意見に書いてあるが、「観光課事業」の中には入っていない。

文化財の古民家の集落再生など、観光まちづくりの中でもう少し広い意味で皆さんから意見をいただき、それを市全体で取り組んでいくことが必要である。

先日、市長さんの就任のあいさつにも観光まちづくりの話が出ていたが、ぜひ市をあげて連携のとれた総合的な意見をいただければと思う。

本日の資料に沿って、まとまりのある議論をしていきたい。バラバラにならずに一つずつ絞りながら優先順位を決めて、最終的には、達成年度なども入れていきたいと思っている。

今日半日だけでは全ては見られなかったが、3市町村が合併したわけで、他の街・地域も知らなければならない。現場を見て、新たに発見するものがある。事務局や山梨総研と話して、個人的にも現場を見に行きたい。現場を見に行っこそ、初めて皆さんと共感を得る委員会になると思う。他の方と一緒にという方がいたら、ぜひ一緒に行きたいと思う。

そして地域への認識を深めて、今日の資料（アンケートやヒアリング）の意見を合わせた中で、委員の皆さんの意見を聞きたい。委員だけの独りよがりのものではなく、皆の共感を得るものにしたい。

もう一つは、積極的な意見を欲しいということ。議事録については、一度発言者に戻して、修正していただきたい。誤解を招くような発言になってはよくないので、公表する前に修正するところは言っていただきたい。

委員会は今日を入れてあと3回あるが、2回は自由討議ができる時間であり、最後は報告書に基づいて意見を言うということなので、今日は自由意見、皆さんの意見を出し合うということでぜひお願いしたい。

3. 議事

(1) 甲州市観光振興計画策定委員会第1回策定委員会について

委員長： (1)は前回の復習、振り返りということで簡単に説明を。

事務局： (事前資料の第1回の議事録に基づき説明。)10月14日に委員を委嘱、委嘱状を交付。その後、委員の互選を行い委員長に鈴木氏、副委員長に竹川氏が就任。配布資料の説明を行い、質疑応答を行った。議事録は情報公開条例に基づき作成した。ご承認いただきたいと考えている。よろしくお願いします。

委員長： 前回、事務局の説明が長かったため委員の意見が少なかった。議事録をこのまま載せてよいのであれば、このまま載せたい。誤解がないように修正を加えたいことがあれば事務局へ言っていただきたい。

前回、遊休農地等の意見があったが、その委員は本日欠席であるため、また直接話していただくということで進めさせていただく。

(2) 甲州市観光振興 計画課題と論点整理について

委員長： 配布資料を事前に読んで、キーワードで4枚くらいにまとめてきたが、非常に皆さん良い意見を言っている。地域住民がどういうことを考えているかという共

通認識に立つことができると思う。この発言は、20名近くの方をヒアリングした基があり、整理したということである。よくまとまっていると思った。

現状と課題から主要施策の7つについて、これから進めていく方向性ということでご意見を言っていたきたい。

細かいことはそれぞれのテーマごとに話したいと思うが、最初のところが7つの括りで話がまとめている。これが最終報告になっていくということではないが、今の段階での主要施策はこの7つくらいに集約できるのではということだと思う。

3市町村が合併したが、エリアごとの個性化の推進ということで、来る人にも分かりやすいということ、主要観光拠点は一つのイメージをはっきりさせていかなければいけないということ、全市的につないでいく、関係性を付けていくということ。4つ目は文化ということで、文化財等、文化というものは目に見えないが、目に見えるような形でまちづくりを推進する。

また、この委員会もそうだが、住民と行政との協働、企業とも一緒にやっていく。そういう中でまちぐるみでもてなすこと。

インターネットの話も出たが、効果的なPR。また、広域化、国際化で、より広がりのある、将来に向かってという7つ。

甲州市の基本目標、基本方針について、皆さんの中で意見があればぜひ発言を。

読んだ中では、甲州市の自然や文化は感動モノだなということをおっしゃる方が多い印象。甲州市の自然や文化、感動するものを伝えていきたい、大都市の隣接地の癒しの空間として整備していきたい、という意見が出ている。また美味しさ、もてなし感が重要ではないかという意見も出ていた。歩く甲州の道という言葉が出たのは、歩いて知ってもらおうという観光が狙い。また地産地消などで、美味しさ、美しさ、おしゃれ感をもっと出したらいいのではないかとすることを基本方針で考えていきたいと思った。

委員：例えば「勝沼エリアの課題」ということで、この間も新聞に出ていたが、フットパスといった新しい取り組みが始まっている。住民の方々のルールの問題などがあるが、そういうことを考えていくと観光というのは、直接関わる人だけでやっていたらダメ。地域全体、誰もが来ている人をもてなすという場を作っていくためには、皆が理解し合ってやっていかなければいけない。

後で協働というキーワードが出てくるが、そういうところを今後の課題として整備しなければいけない。

委員長：委員から話があったように市全体で取り組んで、総力を結集していくというのが観光のあり方だと思う。他の部局も一緒になってやっていかなければいけない。甲州市が日常的、普段着の生活というもてなしができるためには、観光の部局だけでなく、観光業者だけでなく農業者も含めて皆でやっていく。

委員：フットパスとか、歩いて巡るということが必要になってくるときに、点と点を

結んだところを歩くが、歩いていく最中にはいろいろなものがあると思う。それをもう少し掘り起こし、案内ガイド、パンフレットの中に入れていくことが必要になってくるのではないか。

『るるぶ』などの雑誌には有名な所しか載っていない。私は市町村に行くと必ず市役所に行き観光パンフレットをもらう。それぞれ詳しいことは書いてあり、車で回るときには非常に便利だが、「AからBへ行く途中にこういうものがある」などの、もう少し詳しい説明があったら、歩いて回っていただけるのではないかという気がする。

ワイナリーについてはワイン組合でワイナリー・マップを作ったが、ワインツーリズムで作ったワイナリー・マップのほうが面白いようだ。というのはワイナリー以外のことも少し入っているため、見ていても楽しいし、それを持って歩いても楽しくなる。そういうものは必要かと思っている。

委員長： 全国を歩くと、個人が作ったマップ等もずいぶんあり、ブログ等にも載っている。きめ細かく歩くためには工夫がいると思うが、現在の観光は「歩いて楽しむという観光」が基本になっている。

例えば、信州の「NPO 夢空間・松代の夢と心を育てる会」では、住民が写真を撮り、編集をして冊子を作り、歩く楽しみを作っている。行政にお願いするのではなく、住民自らが作っている傾向である。

委員： ここに歴史文化財はたくさんあるが、芸術というものが全くなく、いつも寂しい思いをしている。以前、国立美術館で県内の大小美術館が集まった大きな展覧会があった。そこで清里、北杜市などは大小の美術館があってそれぞれが個性ある美術館として出している。こちらの東山梨では根津美術館が一つあるだけ。甲州市にいたっては一つもない。考えてみれば、自分が発表する場もなく、芸術に対する認知度、関心度が非常に低いということを常々感じている。

資料にも「文化の見える交流のまちづくりの推進」となっているが、「文化・芸術の見える」に変えてはどうか。東京などは展覧会をすると並んで見るところもあるが、甲州はどうも関心が低い。甲州市にも目玉になるような美術館等、芸術を見せるところがあれば良いと思う。ぶどう狩りをしてすぐに帰るのではなく、そういうところを見て、体験するということがあればいいかと常々思っている。そんなところも考慮してほしい。

委員長： 基本的な方針にある「文化の見える交流のまちづくりの推進」というのは、過去にこだわる面が強い。土地柄、塩山、大和にしても古いものがあるということでそちらに偏り気味である。

どうしても古いものばかり目が行くが、「新しい、夢の」というところをもう少しの中に入れ込めたらいいと思う。

小布施も歩く町で非常に小さな町だが、美術館が7つくらいある。甘草屋敷も

美術館・博物館と考えれば、飾り雛等の新しいものの展示場にするといったことができ、芸術の新しい展示場になる。今、一つしか美術館がないといったが、工夫すれば、計画の中に入れて提示できる。

委員： フットパスはかなり特徴のある観光の目玉のような形で推進していると思うが、地元にもどこに何があるのか、歩いていても車に乗っていても分かりづらい。ワイナリーだけではなく、文化的な施設等についても、もっとはっきりと分かるように標識があれば、フットパスのような運動もより定着してくるのではないか。

委員長： 資料にもあるが、歩いて学ぶ市民ウォーキングだが、先程の長野市松代町も最初に地域の人が地域を知る。地域を歩いて地域のことを勉強することからスタートした。歩いて何があるのかを地元の人がまず発見してそれを面白がっていくことは重要だと思う。ただ、イギリスのフットパスなどを見に行ってもあまり看板がついていない。看板を見て分かってしまうのではなく自分で発見する、ということで、歩く楽しさをどうやっていけばいいかということが重要だとの考えもある。

甲州市があまり知られていない。勝沼、大和、塩山は知っているが、地域をもう一度見直し、賞味期限が切れていたところを新しくするというのは何か。面白そうだ、美味しそうだと、スイッチがパチンと入るようなマップや計画になればいいと思う。

委員： 塩山地区は甲州の鎌倉とよく言われるが、何が甲州の鎌倉なのか良く分からない。鎌倉というのはお寺だけでなく、もう少し幅広い文化みたいなものがあって、初めて鎌倉というひとつのものを醸している。恵林寺もある、放光寺もあるというだけではなく、もう少し掘り下げた感覚がないのではという気がする。

委員長： 地域のイメージは重要で、「甲州の鎌倉」というのも、それがふさわしい言葉であるのかは考える必要がある。地域イメージがはっきりしない地域は生き残れない。新しい計画を作りながら新しい地域のイメージが出るようなコピーや言葉を作ることも重要。

委員： 観光というのはまず地域の市民がもてなしということを考えなくてはいけない。観光の計画を作るときに甲州市はこういう観光の街を目指すといったスローガ的なものを出し、計画の中に入れ、市民も抱きこみ、「甲州市はこういう街にしたい。ですから市民の皆さんも一緒に協力してください」といったいくつかの宣言的なものを作れば、観光客も（甲州市が）目指しているものが分かる。

委員長： まちづくり憲章を作り、こういうまちづくりを目指しますというものを掲げてやっているところもある。住民の憲章への希望があれば実行することが重要であり、住民の活動から「もてなしの憲章」ができれば面白い。

【エリアごとの個性化の推進】について

大和地区・日川渓谷の観光資源の課題

委員長： 国土交通省の調査で、市町村合併のときに「個性ある街づくりの継承」が一番課題と言われた。今までやってきたまちづくりが市町村合併で途絶えることがないよう、合併で個性がなくなることだけは避けよう。

地域ごとの個性の推進、具体的には、大和から入って勝沼、塩山エリアという形で進めていきたい。まず、大和エリアの個性をどう推進していくか。

今日も昼に蕎麦をいただいた。蕎麦切り発祥の町だが、蕎麦屋が2軒しかない。大和が蕎麦でいいのか、ほうとうなのか。また、ハイキングコースの問題、竜門峡の問題、甲斐大和駅の前が寂しいなどの問題がある。

委員： 大和は蕎麦切りの町として今までは掲げてきたが、あきらめてもいいという選択肢もある。現状を見ると、魅力あるものではないのではないかという気がしている。ここにふさわしいのか、見えてこない。

委員長： 蕎麦切りの発祥地だということで観光客が来たら、そうでもないのがっかりさせてしまう。

委員： そう。だから成果の出ないままずっとやらなくてもいいのではないかという感じを今日受けた。車の中から見て、あれだけの素晴らしい景観があるのだからそちらに力をいれたほうがいい。

委員長： 二者選択ではないが、蕎麦の可能性はどうか。蕎麦屋は今2軒しかない。いろいろな蕎麦屋を訪ねたが、蕎麦の名所に行くと、蕎麦を食べたくなるし、美味しければ、もう一度行きたくなるが、大和はそれから遠いという気もする。ただ発祥地というだけでは人を呼ぶのは難しい。可能性があればぜひ言っていたきたい。

蕎麦の可能性を追求するか、蕎麦を捨ててしまうか。捨ててしまうということになれば、何か方法もあるのでは、という意見も出るのでは。

委員： わざわざ捨てる必要はないと思う。蕎麦の祭りはしていないが、毎年ほうとう祭りをしている。田野地区の主婦の方々が大きな鍋でほうとうを100食程度作る。同じ形で蕎麦祭りもすれば多少人も来るかもしれない。発祥の地の看板をもう少し大きくするなど整備することにより人が来れば、またここで蕎麦屋をしてみようかという人も出てくると思う。

今は観光で来る人が少なく、店をしていても仕方ないため2軒しかない。

委員長： 資料を見ると、蕎麦切りの発祥地なのになぜ「ほうとう祭り」をしているのか、という地元の人意見も出ている。山梨は「ほうとう」というイメージが強いため、「ほうとう」だと人が来る。山梨の蕎麦屋に全国から来るかということ、限られ

る。本気になって蕎麦をやるかどうか。観光というのは本気にならなければだめ。本気でやるならば、大和も江戸蕎麦を勉強する必要もある。看板だけ掲げて、お祭りをしても、美味しいものを食べられなければ人は来ない。

委員： 個人的な意見だが、美味しいもの、その土地でないと食べられないものでないとお客さんは集まらない。「蕎麦発祥の地」の看板を掲げて、どこでも食べられるような味だったらあってもなくても変わらない。もし、蕎麦でというのであれば山梨で採れた材料を使って美味しいお蕎麦を食べさせるところを出すとか。

委員： ここでは蕎麦も作っているのか？

委員長： 蕎麦粉も作っていると書いてあった。北海道の幌加内町は蕎麦の生産地だが、蕎麦打ちの技術がないとダメだ。実際に美味しい蕎麦を食べさせなければ人は来ない。

委員： 県内でほうとう以外で言えば、吉田のうどんが人気だが、かなりの年数がかかった。(吉田の)隣の忍野でも蕎麦がある。蕎麦は山梨県だけでも昇仙峡、早川、北巨摩では旧町村全てに蕎麦打ち体験場がある。高根、大泉では減反政策で蕎麦の粉を他へ売るくらい作っていると聞く。

そうすると、蕎麦がメインになるのか。何か特色がないとだめだ。一つの例としてほうとうに似たものでミミ料理がある。ミミもほうとうなのだが、「つくたべ館」は観光バスも来るし、体験もしている。やはり何か特徴がないと。

もっと手ごろにある自然とか何かの中で来たときに、地元にはこういった素朴な味があるよ、というやり方もある。

委員長： 全国レベルでは「蕎麦の山梨」はあまり知られていない。甲州の蕎麦というより、ほうとうで売っている。甲州市のイメージと一緒にしているから、「甲州ほうとう」がやりやすいのかもしれないが、何にしても本気にならなければ。

「ミミ」は珍しさでうけているが、似たようなものは仙台等全国にもある。

総研： 補足させていただく。ここにあるエリア分けは、第一次総合計画の中で方針を出しており、6つの地域分けがされている。この分け方でよいのか、もう少し別の分け方があるのでは、といったことも念頭において討議を進めていただきたい。討議をして皆さんにご意見を出していただく中で、地域エリア分けがいいかどうか。これが絶対ということでもないような気がする。補足をさせていただいた。

委員長： 具体的なものがないと意見もないと思うので、まずは大和からはじめ、勝沼は2つに分けたほうがいいのか、塩山も分けたほうがいいのか意見があれば。今の蕎麦についての「このままではやらないほうがいいのか」というくらいの議論が出してほしい。

市では、大和の蕎麦については、今、施策として考えがあるか。

事務局： 合併前の大和村によって蕎麦を振興しようとして、作付け奨励の手配等を進め

ていたが、合併後、そういうものが薄れていることは確か。新たに蕎麦について何かを取り組むという考えは今はない。蕎麦の作付けも以前よりだいぶ減っている。地元の蕎麦屋でも地元の蕎麦粉を使っていないというのが実態。

委員長： 重要なのは、しっかりとした大和のイメージ形成できるもので、なければ人を引き寄せられないし、コミュニケーションもできない。何かコミュニケーションのスイッチが入るといったものがあれば。自然景観という話が出たが、一つは渓谷と山の話。渓谷では竜門峡は行きづらい、整備がされていないという話があった。先程（視察のときに）、450名来てといった話があったが、その時の状況と感想を。

委員： 10月31日だったと思う。参加者は450人、時間も2時間くらい。それほど前が詰まっているという話も聞かなかった。道を間違えるということもなかったため、竜門峡に入ってしまうといいと思うが、足元が悪い、手すりがなくロープが1本あるだけといったところがある。ハイキングと登山の中間くらいの感じ。

委員長： 首都圏から来た人たちが満足する、魅力ある場であるか。

委員： それなりに結構集まっているため、魅力ある場所ではないか。

委員長： 日川レジャーセンターを見たとき、古くて、渓谷に来たという魅力はあまり感じなかった。レジャーセンターを作り変えるということをしていないといけないのではないか。

山は登っていないが、インターネットに出ているのを見ると、楽しみにこの周辺の山に来ているという人たちは増えてきていると思う。

大和について、魅力あるところがあれば言っていただきたい。

委員： やはり豊かな自然というのが一番。甲府からこちらに来たが、景色がとても良い。竜門峡、日川渓谷は素晴らしいところだと思う。以前は子どもを連れて歩いていた。東京に行った子どもたちも、帰って来ると「大和はいい」と言っている。娘は大学の映像科にいるが、大和を舞台に映画をつくっている。自然が豊かなのでそれをアピールできれば。

竜門峡は大変よいところ。2時間あれば行けるのだが、整備がしっかりしていない。資料にも「きっちり宣伝をすれば・・・」とあるが、宣伝が足りない。もう少しコースや足元、宣伝などを整えればそれなりになるのではないか。

委員長： 渓谷や山のハイキングコースをもう一度きちんと歩いてみて、整備する価値があるならば整備し、人を呼ぶなら呼ぶ。私からすると日川レジャーセンターという名前からして古い気がする。竜門峡にするなど、自然を歩いてもらう気持ちがあれば、を調査して、どうやって魅力をつけていくかを考える。

山の道も整備しなければいけない。今、妙高高原では地元住人が夢見平の歩道を、約10km整備した。案内も地元住りがボランティアでやっている。多くの人 coming しているが、宣伝しただけでは人は来ない。歩きやすく楽しく整備したり、住

民が案内する方向になっている。単に自然が美しいだけでは、私は観光資源にはならないと思っている。

委員： 皆さんと話し合っってよい方向に持っていくということではないか。大和の一番優れているのは自然の豊かさであり、それを生かした人呼びを考えるべきと思う。

委員長： その可能性はどうか？私は山に行ったことがないため、整備ができるかどうか分からない。普通の人歩くことが不可能であれば、見るだけになってしまい、溪谷から見るということになっていく。

歴史的なものもあるが、今、コミュニケーションのスイッチがバチッと来るという感じではない。

住民の人が、自分たちで資源を維持管理したり、それで人を呼んだり、観光にもしていこう、自分たちの楽しみにもしていこうという意識が大事だ。

大和の自然学校と同じように、妙高高原でも環境教育に力を入れている。ただ大和の自然学校のことは地元の人にはあまり知られていないと資料に書いてある。

委員： 私は講師として行っている。小学館が運営をしている。東京のほうに応募があるため、東京の方が来る。以前は藍染をしたが、東京の方々と甲州市の何人かが参加した。

委員長： 妙高高原の場合、教育委員会等と一緒に自然教育をしたり、先生は山の仕事をしている地元の人などである。

委員： 自然学校も大和の地元の人が先生をボランティアでしている。知られてはいないがやっている。

委員長： 今の話で、大和といえばこうだというものと、事務局がまとめていくうえで、自然を活かせるのか、蕎麦も本当に活かす方法があるのか。それをこの委員会や知恵の中で考えられるのかということになると思う。

委員： 蕎麦の話だが、今は大和でほうとう祭りをしており、住民は蕎麦なんてほとんど頭にないと思う。だから、それに組み込んで行くには、まず地元の人たちに学習してもらわないと。

それに現実にほうとう祭りを地元の人たちは一生懸命やっている。40年くらいしている。だから蕎麦が発祥の地といっても、地元の人頭にはない。現実に、甲州市のマップにもほうとうマップはあっても蕎麦マップはない。だからいくらここで蕎麦の議論をしていても、これこそ机上の空論になる。現実には地元のパベランの方で素晴らしい蕎麦を作る方もいるのだが、それを広げていくというのはかなりの労力が要るのは間違いないと思う。

この委員会でどういう方向付けをするかは、そういうものを加味すべき。

委員長： 東京から見ると、山梨はほうとうだ、と言うが、ほうとうを名物に一番美味しいものを食べさせるのはどこかという県内での地域は限定されていない。

甲州市のほうとうが美味しいと売り込めば、その可能性はある。実際にそれだ

け食べる所があるか。お祭りだけでなく、ほうとうのまちと言ってしまえば。

委員： 確かに甲州市にはいろいろ観光資源はある。宝庫だ。ただ、事務局もそうかもしれないが、なかなか扱いきれていない。市町村合併して4年。勝沼ワイン、ぶどう、武田史跡、大菩薩といろいろあるが、それを点から線、面にして関連性をつけていく。その辺をできるだけこの委員会でも知恵をいただきたい。

山梨県の5つの国宝のうちの3つは甲州市にあるのだからもっと活用しなければいけない。むしろ地元にはいない皆さん方から甲州市という意見で出してもらえれば、それが具体化するのに一番いい観光の目玉になると思う。ぜひ、いろいろ出していればと思う。

委員長： その点はネットワークのところで議論していきたい。今は大和のところで、一つずつの点をしっかりさせなければいけない。今までの話だと、蕎麦をやるならばもう少し勉強してしっかりやらなければいけない、ほうとうをやるにも、ほうとうを食べさせる所があって、ほうとうが名物、甲州市全体でほうとうマップがあり、ほうとうが一番美味しいのが「甲州」にしていく。湯布院ですら、食事の勉強をしてレベルアップしている。地産地消ということで地元の小麦粉を使うとか、蕎麦粉を使うなど、そういうことを本気でやるかどうかを確かめなければいけない。

自然に関しても、自然はいいが、どうやって人を引きつけて、魅力ある、活用できるものにするかというところを議論していかなければいけない。

どちらにしても大和の駅前が寂しい。人を迎えるということに実際にはなっていない。そこでもう一度、検討していきたい。

勝沼エリアの課題

委員長 次は勝沼の課題と方向性について意見を。

委員： 勝沼といえばワイン。ワインといえば葡萄ということだが、そこから一步抜け出さないと発展はないと思う。先程、歩くということがあったが、それを利用して視点を変えて活用していく。そういった意味で、今あるものをどういうふうに活用していくかということに目を働かせないと。昔からの伝統の観光地ということで、軒先でお客さんを待っているという世界ではもうなくなっている。むしろ、お客さんが1日なり半日、そこで楽しんでまた来てもらうような仕組みをどうやって作るかということの中で、歩くコースだとか、もっと言えばいろいろなブドウ、ワイン以外のものを。

委員長： 他には何があるか。

委員： 歴史的なものもあると思う。建物で、どこか門を直したところが一ヶ所ある。行っていただければ分かると思うが、民家の門を直した。

あとはもう少し街づくりみたいなもので、花などを植えて作って行くとか。

委員長： 勝沼は花のまちづくりは結構熱心にやっているほうではないか。

委員： そういうものに人が来なければ。ハーブガーデンなど民間業者などはあるが、そこは観光バスが来る所であって、そうではなくて歩いて楽しんで帰るようなもの。私が思うには、勝沼にもう一つ魅力が増えないのは、例えば清里などと同じではないか。そこに寄ってくる店がないということは、そこに滞在する人がいないということ。魅力を作るという意味では、例えばクラフトやガラスといったものがもう少し増えてくるのがいい。ワインとブドウだけでなく、もう少し遊び心が出てくる。そこに美味しい食べ物屋が出るとか、そういう線をつながないと、人が寄ってくるような街づくりがなければいけない。

委員長： 今の意見はワインやブドウに頼りすぎているのではないかという意見であるが。

委員： 先日行われた勝沼のワインツーリズムに店を出品させてもらったが、やはり勝沼と言えば皆、ワインを楽しむというイメージが出来上がっていて、それを楽しむに來る県外のお客さんが多い。それをソフトツーリズムという会社が中心となってワインツーリズムとして、市役所の方もそれに付随して盛り上げていったと思う。来ていたお客さんに話を聞くと、縁側カフェや自分たちで歩いて散策して、自分たちで自らいろいろな何かを探して行くという楽しみもあるということで、その点では勝沼はすごく良い街だと思う。

委員長： ワイナリーを活かして、ワインツーリズムをやって観光をしていくという今の方向性は良いのではないかということか。

委員： はい。それを増やしてもいいのでは。

委員： 私もそう思う。

委員： ワインを中心にして、ワインのツーリズム、ワインの文化、ワインと食という核をワインにして広げていくことが、勝沼にとってはよいのではないかと思う。

委員長： 勝沼といえばワイン、ワイナリー、ブドウだ。それをもっと強く出していったほうが、活かせるのではないか。

委員： 景観も素晴らしい。ブドウの丘や釈迦堂遺跡辺りから見る景色も素晴らしい。しかし一つ思っているのは「足」。どうしてもワインとなると車では来られない。車で来た場合には誰かひとりが犠牲になってしまう。歩くと行っても車で来ない場合にはJRで来るが、勝沼駅や塩山駅を出発して歩くとかなりの負担となる。周辺までの移動手段をもう少し整備していただきたい。

例えば勝沼駅から岩崎辺りまでのブドウの丘経由のバス等。少なくともシーズンにはもっと頻繁に。

委員長： 資料にも出ているが、ワイナリーめぐりをしたり、コースをしっかりと整備すればワインをもっと楽しめる。実際にはワインツーリズムは最近出てきたこと。ただ勝沼はワインを作っているまちだが、ワインに合う食事の提供などまであまり

していなかった。世界の中で、ワインの産地に行くと、ワインと食を楽しむ文化があり美味しいレストランがあってというところが多い。ただ、ワインを生産するだけでではない。小布施もそうだが、栗や食を楽しむ文化がある。

委員： 甲州市＝ブドウ、ワインという知名度があるということだが、実際にイコール勝沼のイメージだ。勝沼は甲州市の中で重要な、中心となるようなもので、勝沼がコケると甲州市全体が埋没してしまう可能性がある。一般の人から見ても、勝沼はブドウでありワインであるため、大きな核として、ブドウ、ワインは全体の柱としておかなければいけないが、それ以外の部分、文化や芸術とかを大和や塩山で補えばいいのかなと思う。

しかしやはりワインとなると、20歳以上が対象となってしまう。その年齢以下の子ども達はどうか。子どもが動けば親も動くのだが。そういうところは勝沼エリアの課題。

委員長： 私もいろいろな人に話して、山梨においでというと、ワインが飲みたい、ブドウを食べたいという話を中心となる。地元の人がイメージや得意技を出して行く、全国の人をひきつける価値があるのはワインやブドウであると思う。それを歩く観光にしたのは、今まで作っていても産地を訪れる人がいない。産地に来てもらって、食べたり飲んでもらう。産地に最高のものがあるまちが栄えている。先程、言われたことは私もその通りだと思う。

ワインやワイナリーのことは、甲州市のHPを見てもあまり発見できない。そこは強く出ていない。一つ大きな問題かと思う。

フットパスの歩く甲州も、個性としてもっとワインを強く出していいのかなと思う。

ワインとブドウを彩るものは歩く道の整備であったり、花とか、アートといった、周辺の文化として生まれているのは事実。はっきりした個性は中心に出していきながらエリア分けをして行くのは重要。

清里はお土産店であって、ものを実際につけてなかった弱みと言える。本物がないのが清里の弱み。やはり本物としてのブドウやワインをきちんと作っていくことを続けるということ。

委員： 「ぶどうの丘」では千円出すと、全部飲めてしまった。そうすると完結型。歩くというのは最近出てきた。歩いてフィットネスとか、学生たちがいくつかのコースを作るといったことは前はなかった。

勝沼の駅から塩山の駅までとかそういう合併のメリットを生かしたバスの運行はされていない。そうすることで、勝沼でワイン、ブドウを楽しんで、塩山で歴史的なものを見ることができる。半日が1日、2日になりといった時間をかける。そこに滞在する時間が長くなる。そういう工夫もやっていくべきでは。

委員長： 意見が出ていたのは、タクシー会社の相乗りタクシー、パウチャー券の話、オ

ンデマンドバス、ジャンボタクシー、ワイナリーめぐりバスという話。足の問題というのは、勝沼の重要な問題、また広域の問題と両方ある。どこかできちんと公共交通については論じていかないとならない。ワイナリーが世界であれだけ小さなおところに集積しているのに、それを魅力として活かしていないということもある。タクシー会社も中途半端である。また大菩薩への登山バスが運行されてもPR不足等、足を無視した観光だと思ふ。そのあたりはネットワークのところて論じていったらいい。

勝沼はぶどう園通りがあり、ぶどう園に車を置いて歩くなどの工夫をしている。

どこもそうだが、二次交通、足の問題、高齢者の問題、そういうものをネットワークしていく必要がある。

また、塩山、勝沼、大和の機能分担をどのようにしていくかを、また個別の問題として話したい。

委員： 今、勝沼地域は、ワインとブドウと近代化産業遺産を整備して一つの観光にしている。皆さん、近代化産業遺産の関係で意見があったら言ってほしい。

委員長： 富岡市もそうだが、近代化産業遺産は全国的に注目されている。

フットパスも注目され、全国の人は勝沼に目を向けるというのもある。

委員： フットパスというのは、そういうところも見て回ってもらうという意味もある。ブドウとワインだけでは観光ができなかつたため、もう一つ魅力を加えようということで、7、8年前からやり始めている。良い方向だとは思ってはいる。

委員長： 観光行政の予算方針を見ても、観光予算のうち近代化産業遺産整備事業が3億3,900万のうちの2億843万円を占めている。それだけ重点的に整備すれば、魅力あるところて変わってくると思ふ。

無駄のない形で重点的に整備して、そこに来た人を分散していく、それを回してくるといふのは戦略としてはいい。魅力がなければ人は来ない。核がしっかりしていないと、イメージがはっきりしていないと人は来ない。魅力があるなら、それを十分利用してもらう。

近代化遺産も全国を見て歩くと、今、景観まちづくりといったものもあるが、全体のたたずまいとか産業が景観を作ってきたといふのは注目されている。

塩山地域の課題

委員： 雲峰寺も恵林寺も向獄寺も臨済宗。鎌倉は臨済宗が多い。そんな関係で、甲州の鎌倉と言っている部分もある。そういう「なぜ、そうなのか」といふ訴えが弱いのではないか。臨済宗の結構有名なお寺がこれだけまとまってあるといふことが、うまく説明されていないのではないか。

今日の雲峰寺の住職の話でも、恵林寺の話は出てきたが、もう少し関連性を話

して、やって行けばよいのではないかと思う。どうもキャッチフレーズ倒れになっている気がする。

委員： 「甲州の鎌倉」ということ自体も気後れしている。上には鎌倉がある。だから最近皆さんそういうことは言わなくなった。甲州の鎌倉という言葉がパンフレットにも出ていたときがあったが、それは一掃したほうがいい。独自路線でいかないと。

委員： 先日、恵林寺で座禅体験をした。座禅であるため、禅宗の寺でしか体験できないのだが、今話があったように塩山には臨済宗の寺、座禅体験をさせてもらえる寺がたくさんある。

今、「文化的なものを体験」という要素がものすごく重要になってきているのではないか。ただ寺を見たり、寺の庭園を見たりというだけでなく、自分が仏教文化の何かを体験できるということは、観光的にも良いことだし、魅力あること。日本人だけでなく、外国人も鎌倉に行くと座禅体験等をしようとしており、魅力的なコースになっている。だから、体験的な観光も考えていけたらもっともっと観光が豊かになるかもしれない。

委員： 大分なども「観光」というのは見るもので、体験型には「ツーリズム」という言葉を使うことが多くなっている。今の人たちは見るだけでは満足できない。何か体験、実感していくという方向に行っていると思う。

私は、塩山は日本のふるさとのように懐かしい感じがしている。松里にしても、恵林寺、放光寺辺りを歩いてみても非常によい風景が残っている。普通の民家の佇まいも、塩山には素晴らしいものがある。なぜああいうものを強く出していないのかと調べていたら、皆さんも同じことに気付いている。意見の中にも、「周りを歩くだけでも東京から見ると癒しの空間」とある。宗教的、仏教的な癒しの空間のところで体験できたらと思う。そのあたりを強く出していくということも、塩山の一つの魅力の出し方だと思う。

委員： その考えは良いと思う。今、若い年代の人たちも座禅や精神的な部分の癒しを体験し、自分自身を高めたいという思いを持っている人がとても多いため、座禅の体験などを売りにしてもいいと思った。

委員： 向獄寺は東大の先生が合宿ではないが30人ほど毎年来ている。向獄寺は本当の禅寺で観光には全く無頓着。ところが恵林寺と放光寺は観光にある程度力点を置いている。向獄寺さんはある程度プライドがあって、禅寺としては開放しているが、塩山の観光地にしたいといっても、そういうことは塩山の事情としてある。

ただ、放光寺も慈雲寺も恵林寺も向獄寺も皆、座禅ができる。

委員長： 学生たちはどういう話が聞きたいかという、心に効く話が聞きたいなどという。今は不安が多いし、就職も決まらない。中高年も景気などで不安が多い時代。宗教的なものにすがりたい。先程の話もあったが、国立博物館では宗教モノをす

ると当たるといふ。妙法寺展とか阿修羅展等をする。塩山はこうした方向で出すときではないか。懐かしい風景もある。京都もそうだが、寺の魅力が見直されている。高野山も今、世界から人が来ている。宗教空間に対する憧れを活かしていくのが塩山。国宝ツアー、国宝自体が見られないというのは問題だが、どちらにしても癒しのツアーなど、塩山の魅力になってきているということは皆さんに共通してきていると思う。

委員： 塩山地区は市内でもサクランボ、桃、スモモ、ブドウ、秋の枯露柿まで非常に豊富。全国の人たちが都会から田舎に来る理由は地域の特産品に触れて体験をするような形。あるいは市内にある文化財を見る、市内にある温泉に入るといった体験型の何かを入れたら第一次産業と第三次産業が安定するのではないか。

PRをうまくして、JRや交通関係者とともに出していくほうが甲州市の魅力がさらに引き出せるのではないか。

今から農業後継者が非常に少なくなってくる。また団塊の世代の人たちが第一次産業に携わりたいという声もよく耳にする。そういうことも取り入れていけばいいのではないか。

委員長： 資料の中でも、食、グルメ、カフェレストランなどが出てくるが、やはり加工品が弱いと言っている。単なるフルーツだけではないものが望まれている。

フルーツを活かしていくのが甲州市の大きな課題だが、この印象が薄く、土産物、特産品がワイン以外に少ない。全体の問題としていきたい。

新たな観光資源の発掘、整備について

委員長： 「古民家を生かした農家民宿・農家レストラン」「百名山ツアー」などが出ているが、少し新しいものを出しながら何か発掘していきたい。先程の座禅もあるし、グルメや名物の話しもある。欠けているのは体験型の話、またフルーツを活かしていく、商品を作る、オリジナルの名物を活かすということになるがどうか。

委員： 前に市のHPでイベントの検索をしようとしたが、思うように条件に引っかからなかったり、欲しい情報が市のHPからリンクされていなかったりで見当たらなかったことがある。今、観光に来る方はだいたいパソコンで調べてくる。市のHPからリンクできる、またもっと分かりやすくなっていると良い。調べにくいという印象があった。

委員長： 行政が出すものは公平だからどうしても面白くない。今、全国の情報発信の仕方が変わってきている。楽しさ、面白さの情報発信がリンクできるようなところは情報発信のところで、ぜひ話したい。甲州市は面白そう、何かやっていそう、楽しそうということが伝わるようなリンクの仕方ができればいいと思う。市では難しいかもしれないが、方法はあると思う。公平でない楽しい面白さが基準だと

ということもあつたら面白い。情報も地域資源である。

委員： 私は山梨市に住んでいるが、山梨市は昨年、良い風景を市民が写真で応募する「山梨市 100 景」ということをした。非常に良いことだと思う。市民が「おらが地域」の良い景色を応募して、それが山梨市の 100 景に選ばれる。そうなるともう少し地域を綺麗にしようとか、良い風景を残そうとか、いろいろ芽生えてくる。

甲州市も、もう少し市民参加型の観光開発をしてはどうか。

委員長： 映像というのは力があり、地域の写真 1 枚に良いものがあると、甲州市にも人は来る。映像は資源だと思う。今はそれを市の方にどうやってリンクしていくのが課題。市民参加型にはインターネットもある。インターネットでホームページを検索したり写真を見たりするため、コストがかかるわけではない。山梨百景など映像をどう見せていくか、という工夫があっても良い。

若い人達は映像に反応する。年配の方も非常に簡単に撮影はできるため、映像を新しい観光資源というかたちで、地域の美しい写真を発表する場を作っていくということも大きいことだと思う。

資料には百名山の話がずいぶん出ている。ブログにも非常に多くの方が書いている。勝沼の高峰の辺り、大滝不動尊から歩くような内容がブログに非常に多い。山歩きをする人が増えてきているし、最近フリークライミングの現場を見に行くと海外の方が来ている。自然志向が非常に強くなってきている。甲州市の山が「ハイキングコースとして楽しめる」ことをもっと発信しても、東京から近いので良い。例えば西沢渓谷は山梨市にあるが、塩山からも行ける。大菩薩峠なども話すと行ってみようという気になる。山の魅力について、大和地区だけではなく、甲州市全体で取り組んでいくというのは、新しい観光資源として意外とやっているようでやっていなかったと思う。ブログを見ていただくと、いかに写真を撮って楽しんでいる人が多いかが分かる。写真と一緒に連動していけば新しい資源になると思う。

先ほどの仏教文化を生かした座禅・法話も新しいことに入ってくるし、またフルーツの話で言えば、フルーツ・マスターなどやフルーツ・ツーリズムということがあっても良い。甲州市はフルーツの加工品分野も弱いけど、上手く活かしていけば結構魅力あるものになると思う。

委員： 今よくやっているのは『駅からハイキング』。電車で来ていただいて、自由にハイキングコースを歩いていただいて、食事というコース。

委員長： 歩くと疲れるので、食べて、(バスなどに)乗って行ったりするし、滞在時間が長くなるので消費額も多くなる。コミュニケーションも出てくるし、来る人も体験型で一日楽しんで行けるというのが良い。

委員： 先ほども話をしたが、お土産を買うといっても『ここで』というものがない。地域のオリジナリティを生かしたものが欲しい。例えばワインや果物を生かした

スターを作ること。これは逆に言うと、地域の人たちが買ってあげなければ駄目だ。地域の人たちが買って東京へ行くときに必ず持って行く。このようにして一つスターを作ることによって、今度は来た人が、『甲州市に行ったら、あれを買って帰ろう』となる。このような仕掛けと工夫が必要だ。

委員長： 地域の人を買う動機付けに、『東京で評判になると地元の人を買う』ということがある。もう少し美味しいものを作っていかないといけない。甲州市へ来て食べに行く場所がないことに悩む。お土産もフルーツの時期には良いが、時期が外れるとない。ワインはあるが、子供さんや女性にはスイーツが欲しいところ。素材はあるのに、加工する技が足りない。スイーツはとても人気があり、駅やデパ地下でもスイーツがないと女性が呼べない。

委員： 今、JAと協議しているが、甲州市の食材、果物はたくさんあるが、加工食品が何もなく、信玄餅しかない。そこで、JAも何か付加価値をつけた甲州市や峡東地域のものをと考え、ぶどうジュースと桃ジュースを作った。しかし、缶に入っているものであり、お土産としての販売が増えない。私どもも市内の特産品を使った、例えば松里地区の枯露柿を加工して粉末にしたり、缶詰やジャムにしたりと心がけているが、なかなか難しい。甲州市のぶどうの丘に年間40万人も来るから、甲州市で特産品を開発するという中で、市の観光課の皆様方から「こういったものはどうか」という話を参考にして、JAと協力して、あるいは地域の担当者と協力しながら、開発を目指している。特に市内の和菓子屋と協議していて、和菓子屋の持っている技術と特産品の桃、すもも、ぶどう、さくらんぼ、枯露柿などを生かした中で生菓子を考えていただきたいと投げかけている。昨年からやっているが、なかなか良いアイデアがなく苦労している。何とか甲州市に行けば食べられるなど、そういうものを作り出したい。

観光土産品の開発・充実について 甲州ブランド

委員長： 甲州ブランドということで、観光土産の開発・充実について意見をいただきたい。言い足りなかったご意見などは、後でまたメールなどでいただきたい。

観光土産の開発・充実についてということで、言われたように甲州ブランドとして和菓子などに土地のものを利用していくということだ。資料にフルーツ加工体験施設やCAの炭酸ガス貯蔵庫の話が出ているが、皆さんが思っているように、おしゃれでなかったり、美味しいものが少なかったりする。もう少し新しい形での甲州市を紹介し、おしゃれな魅力をつけることが大切だ。

全国的に地域ブランドを作っていかに伸ばしていくかという動きがある。素材だけでは人は見てくれないし、伸びない。

おしゃれなデザインを甲州ブランドの中に入れていくと良い。報告書もできれ

ばおしゃれに。地域の良いイメージのものが出ると甲州ブランドにもよい。先程のジャムにしてもデザインで良いものを作る。甲州市はあまり気を使っていない。信玄餅もビニールの包みがあり、その中にも（ケースが）あるが、環境に良くないと言われていた。だからもっと新しいものを生み出していかないといけない。

何かアイデアがあるか。甲州市でこういうものを加工したら良いのではないか、というような。先ほど申し上げたフルーツを加工してジャムなどにしていくのも一つの方法だ。

委員： ワイン倶楽部というものがある。農園のオーナーからワインの出荷までというものだ。例えば沖縄などでやっていると思うが、子供が生まれたときに記念に樽を買って、例えば20年投資するように寝かせておいて、成人したときに瓶詰めのワインを作って親戚などに配るといったものだ。

委員： 瓶に詰めて好きな時に出す。樽は長く入れるものではなく、1年から1年半くらい樽の中に入れて、瓶詰めにする。後は瓶に入れて取っておくのと同じ形式だ。大体1樽が300本くらい。ただ、やろうとした時には利用客がなかったり、少しだけやろうと思ったら大勢の希望者が出たりとミスマッチングが多い。

委員長： 焼酎だと常温で置いておけるため、子供が結婚するまで20年くらいでもとっておけるが、ワインだと少し難しいようだ。

委員： 勝沼は基本的には白ワインが多いため、あまり長持ちしない。

委員長： ワインカービングに行くと、トンネルの中にワインや樽が置いてあったりするが。

委員： あれは保存温度が15くらいなので、条件としてはとても良い。貯蔵に向くような白ワインを作って20年後に出すということも良いと思うが、それが大幅に増えると貯蔵に膨大な場所が必要になってくる。

委員長： 他に何か面白い食のアイデアがあれば。

全国的に見ると本当に工夫をして、成功している事例は多い。本気でやる気を持って何とかしていきたいと思えばできる。ジェラードはちょっとやるだけで1,000万~2,000万円になる。おやきの中に栗を入れて小布施でも出しているが、おやきだけでも5,000万円くらい簡単に利益が上がる。おやきを小さいサイズにして売り出しているところもある。学生たちが、フルーツおやきとか、クレープみたいなおやきなどを発案している。いろんなアイデアを出す機会を与え、コンテストなどの活動をしていけば、それにデザインなどのお手伝いなどができるのではないかと。山梨大の学生なども須玉の文化資源活用協会ではいろいろ工夫して作ったりしている。いろんな試みをもう少しやっても良いと思う。

またフード・コミュニケーターのアドバイス等も受けられる。加工して半製品から商品の提案をし、地元を豊かにしていくということが重要だと思う。

大菩薩登山の課題

委員長： 大菩薩は名前も知られているが、何か気づいたことがあれば、意見を聞かせていただきたい。

私も昔一度行ってから、最近行ってない。大菩薩のピークはいつか？

委員： 大菩薩というか、山自体のピークが20~25年前だ。

委員長： 最近、また人気があるようだが。

委員： 今人気があるのは、高尾山や富士山とか映画などで開発がPRされたところ。やはり天候の不順による影響が大きい。

委員長： 軽登山のようなこのくらいの山は全国的流行ってきた。

委員： そういう部分はある。

委員長： 新たに大菩薩の登山を売り出していけば、何かありえるのではないか。

委員： 名前負けしているところがある。

委員： その名前を知っている人が50代以上になってしまった。

委員長： 新たに若い人向けにアピールするようなことをやらなければいけない。大菩薩に最近登ったことがあるという人はいるか。感想は？

委員： 登った。良かった。ちょうど良い距離で、天気も良かった。

委員長： やはり皆が行く機会を作らなければいけないかもしれない。我々もそこに行くきっかけがないと、なかなか行かない。

委員： 大菩薩の登山競走というのはどうか。参加者は増えているのか。

委員： 事務局と観光の兼ね合いから、結局合併後、開催が不安定な部分もあった。やはり標高的には一人で1,000m以上走るといっているので人気はある。

委員長： 大菩薩は名前もインパクトがあるし、昔行ったときにいいところだったという思いはある。山のほうに目を向けるということも計画の中に入れる必要がある。時代は自然や、山の中を歩くという方向に行っているわけだから、市全体として目を向ける中に大菩薩も考えていくと良い。

委員： 百名山の中に入っており、我々甲州市のシンボルの一つでもある。市内の各種団体に呼びかけ、富士山の清掃登山のようなものを企画していただき、家族で参加できるようにしたら良い。地域の山をきれいにすることから、親子で登るような基礎ができるのではないか。

委員： 登山競走再開のときは、1,700人くらいの参加があった。中止をしてからは6~8割上がったという。こんな小さい町で勝沼のマラソンと大菩薩競走の2つをやっていけば、全国区になると思うが、どうか。

委員長： 今、合併が進んで、結構そういうところがある。合併して消えていくのを防ぎたいという動きが全国的にある。例えば南砺市では4つの町4つの村が合併することによって郷土芸能が200になってしまった。それが消えてしまっはいけない

いと活動をしている。だから、合併したからといって数を減らすというのはNGだと思う。意味のあるものであれば是非残すべき。

大菩薩もそうだが、山道も皆が楽しめるようなストーリーを作っていないと、人が来ないのかもしれない。だから、大菩薩を歩いていくと、『こういう道で、こういうことが楽しめるよ』という案内があると良い。

観光ブドウ園の課題

委員長： 観光ぶどう園は、もう50年になるということだが、意見を。

委員： 農園カフェレストランというのは、どんなものか。

委員長： これをイメージしているのは、原茂園である。今、農村カフェとか農村レストランは非常に人気があり、長野県にもおしゃれなものがずいぶん出てきている。『農村レストラン』や『農村カフェ』をインターネットで検索すると、非常に多いことが分かる。要するに農業者が農園を持っていて、自分のレストランを経営している感じだ。

委員： では、ワイナリーなどとタイアップできる可能性は十分にあるということか。

委員長： 外国のワイナリーだと自分で農園を持って、ワイナリーも持って、レストランもやっている。日本でワイナリーというと農園を持っていない場合もあるが、農園付きで村を見ながら楽しむということ、これは全国で爆発的に増えている。直売所だけでも1万3,000件くらいあり、農村レストランなどはもっとあるのではないか。北海道などに行くとおしゃれなものがある。山梨はわりとカフェも少ないようだ。おしゃれな感じ、おしゃれ感覚のあるところが山梨にはないので、甲州市はおしゃれ感覚のビジネスを興していったらどうか。勝沼などはおしゃれな感じになると思う。

委員： 結局個人でやっているところはあるが、コマーシャルしていないので、見つからない。また公共では個人を取り上げない。やはり『スター』を作ることが大事だが、それを作れないのが行政の弱点だ。

委員長： 今度の計画で見直し、地域の魅力として応援していくシステムを作れば良いと思う。北海道東川町では、起業家に100万円の補助を出し、新たな若い人を応援する制度を持っている。農協なども応援してやっている。

観光ぶどう園は半世紀経っているため、名前を変えたり、農村カフェみたいなイメージになってくると、時代の中で若い人の注目度が高まると思う。

ワイン観光の課題

委員長： ワイン観光の課題ということで、今、宮光園の整備事業などで中心が出来てく

る。

委員： 基本的には観光バスを入れられるところは、非常に限られる。可能な施設は今まで通りやってもらえば良いのだが、ただ、30~40社くらいあるため、個人がこのワイナリーを訪れて、それをワイナリー側が受け入れられるだけの最低限の施設がないとやはりまずい。これは行政の支援がなくても、その会社自体が、今後お客様が来て初めてワイナリーが成り立つという意識をもって、整備していくことが第一だ。

ある程度軌道に乗ってきたワインツーリズムが年1回あるが、今、見ていると、秋になると毎週土日は2~3人で歩いて廻っている様子が定着してきた。それを年間通して増やしていくことが大事だ。それをサポートするためには、やはり交通機関をもう少し充実していただきたい。

また基本的には、良いワインを作って評判を取らなければダメだ。勝沼に来れば良いワインが飲める、という基本的なところにもう一度立ち戻ることだ。良いワインを作って評価され、来ていただいて、もてなす、という3つが揃って初めて観光ワイナリーとして成り立っていく。それをサポートするのが地域の文化だと思う。ワイナリーだけではなく、ワイナリーとワイナリーを歩いていく間に野里の文化的なものが点在しているはずなのでそれを見て、次のワイナリーに行くということではないか。

委員長： 東京にとってみたら、甲州市や勝沼のワイナリーというのはどう思うか。どういふ点をこれから解決していったら良いと思うか。

委員： ワインがたくさん飲めて楽しめるが、1ヶ所行って一日潰せるわけではないので、そういうところが課題ではないか。ワイナリーは山梨以外にはあまりなく、東京にはないのでうまく生かせるのではないか。

委員長： 先ほども話がでたが、ワインの場合は飲酒をするため、交通機関の問題がある。

ワイン観光の課題について他に意見があれば。この辺は核になってくるところであり、ワインで来て、飲んで泊まって行ってもらえば、塩山も潤うと思う。塩山の温泉郷がどういう状況なのか分からないが、この周囲に宿泊施設が少なければ広域的に考えて笛吹市まで広げれば、宿泊施設も充実すると思う。

政策的には観光とワインということで交通の問題が第一。ワイナリーを巡っていくタクシー会社などがルートを作っていけば良いと思う。交通の方から提案すれば、かなり良い。それからワイナリー周辺に『ここは入れる』、『見れる』という看板を作るなど支援をして、もっとオープンにして見てもらうという方針を作れないか。例えば、小布施のオープンガーデンは100軒くらいあるが、『ここから入っていいですよ』『ここは入れません』という札だけを行政が作った。行政がきちんとしたパンフレットを作っているということで、廻る楽しみになっている。

ワイナリーを漠然とではなく、具体的に廻れるシステムを作り、パンフレット

作成時に、宿泊施設や売店などにスポンサーになってもらうなどのシステムを作っていたらどうだろうか。今、ワインのツアーに来て、ワインツーリズムの時にはパンフレットはくれるが、普通に来た時にはない。同様のものを100円などで提供できると良い。インターネットでも購入できるように、行政でしっかりしたものを作成するなど、まだ方法があるのでは。

委員： 専門家の委員さんがおっしゃられたが、やはりワインと食というのは切っても切り離せないものだ。ワインを飲むためにはそれに見合った食事が必要だ。ワインだけでは文化的にも物足りないと思う。甲州ワインに合う、甲州独特の食というものを開発していただきたい。

委員長： それはずっと言い続けているが、なかなか進まない。なかなかレストランができない。料理コンクールなどを過去にやってきたが、観光客が来たとき、それを食べられる場所がない。

委員： 今年のワインツーリズムで、去年の山梨礼讃の「ワインに合う料理コンテスト」で入賞したものと、それ以外にもワインに合う料理というテーマでブースを出し、本なども作った。ただ、今年はコンテストなどもなかった。

委員： 補助金がなかったから。

委員： そうなのですね。

委員長： やはり前から言われている課題。ワインを飲むところが欲しい、料理が欲しい、ということをや前から言っている。最近、地元のものを使うと緑の提灯を掲げたりする認証制度があるが、ワインの合う料理を食べられるレストラン・マークを作って皆に頑張らせるなど、行政が褒めて応援しあげる。それをやらないと、このマップには入れないなどとして応援してあげる。プレートをかけて『地元のものを使って、ワインに合うものが食べられる店です』ということが分かる素敵な木製の看板でも作ってあげるなど、もっと具体的に応援してあげることができないか。

委員： 今、世界的に和食のブームなのだから、その和食のブームに乗って甲州ワインを売らないという手はない、と思う。

委員長： 先日、『今の和食ブームは終わるか』とフランスの人とイタリアの人に話を聞いた。回答は、寿司などの和食ブームはこれからも伸びると言う。なぜかという、フランス料理も中華料理もイタリア料理も全部油を使うが、日本は昆布やかつおぶしなど、油を使わずに旨みを出せるから、健康面からいっても日本食ブームは続くと言っていた。甲州ワインに合う料理に、油を使わない健康的で魅力ある日本食をという一方で、チーズがあっても良いと思うが、とにかくワインに合う料理・店をもっと応援してあげて、メニューを増やしていくことが大きい。

委員： 入り口として、甲州ワインと寿司は合うというが、山国だから、どうしても寿司が手に入らない。一応和食には甲州ワインが合うということは、ある程度認め

ていただいているとも思う。そこを一步進めたいが、なかなか良い和食がない。

委員長： ミシュランのように、ワインに合う料理を食べる店を応援して、そういう店は看板を掲げてあげたり、コンテストの入賞メニューを提供できれば、雑誌などで話題にもなったりする。具体的に一步前に進める案を立てたら良い。

委員： 焼酎や日本酒は蔵出しや通販で売るなど、限定した高級志向、こだわり志向がある。ワインも横並びでやるのではなく、高くてもそれを求めるという世界が必要。もともとは専用酒用のぶどうではなくて、抜いた残りの粕ぶどうで作ったぶどう酒が原点だった。そういうものから脱却する中で、今一生懸命専用酒用のぶどうを作ってやっているわけだから、本場なら本場としてのグレードを持ったワインを発信していくべきだ。他の長野県や山形県などに抜かれている。ネット販売や通信販売を実施しているところの方が賞を取ったりしてネームバリューも出てきた。今までの伝統だけではなく、行政自体ももっと勉強して良いものを作っていけないと勝てない世界になってきている。

委員長： 甲州市は結構良いワインを作っているという自信を持って良い、全国レベルでも評価できると、私は思う。今言われたことも含めて、全国のモデルであることを示すこと、全国に誇れるワインを作っているということを堂々と良いと思う。そうでなければ、これだけの集積地の意味がない。今後の報告書では、全国に誇れるワインを前面におくポスターやパンフレットなどを出していくことが大切だ。メルシャンさんでは、甘口ワインはやめるということを書いていた。

委員： ワイナリーで土産用の甘いワインは作らない。

委員長： こうした姿勢は評価していくような、本物を出していくところを応援していけるようなことをやっていけば良い。また、団体客は受けない、というところがあっても良いと思う。とにかく、甲州ワインは品質が良いということ、『日本一のぶどうの里』にし、『ワインの里』にするという勝沼がやってきたことを甲州市になってもやっていく、というのを強く示すポスターやパンフレットがあって良いと思う。

次回この続きをやっていきながら、まとめていくという方向で良いか。交通の問題、環境の補填整備、全域のネットワークなど、議論しながらアイデアをもらいながら、もう一度まとめて出して、最後にそれをチェックするという形で進めたい。

(3) 甲州市における観光行政の基本方針について

事務局：(資料説明 省略)

委員長： 今、説明があったが、この施策体系の主要事業だけを見ると、皆さんが議論していることの意味がなくなってしまう。例えば、歩く甲州やワインの話、古民家

再生の話などが農村レストラン・カフェにもつながるわけだから、是非施策体系、主要事業の概要の関連性を、結んでいただきたい。市役所内の政策の関係性やつながりが新しい今度の計画の魅力になるわけなので。観光宣伝をやってキャンペーンやイベントをやれば終わってしまうのではなく、今やっていることが他の部局にも届くようにしたい。資料の中でも本当は観光担当副市長くらいいても良いではないか、という話があったが、そのくらい応援していきたいと思う。お願いしたい。

(4) その他

事務局： 今後まとめていくために、委員さんのご意見は全て施策の項目ごとに一度お聞きしたいと思う。せっかくの機会なので、ご意見を十分出していただいた中で、とりまとめに入りたい。12月大変お忙しいとは思いますが、何とかやりくりをいただいて開催していただきたい。

委員長： 取りまとめ上は早い方が良いということなので、12月7日の月曜日はどうか。次回は、残りの部分を議論してもう一度全体を振り返り、この主要施策の7つで良いのか、こういう言葉で良いのかということ、次回そこまではやりたい。資料に書いてあるものを見ながら、それぞれに行くべき方向や、もう少しこういうことを盛り込んだらということ、付け加えたいことを是非考えてきていただきたい。今日の話はまたまとめて皆さんの手元にお送りする。それをチェックしてからオープンにするという形でよろしいか。

事務局： 今日、前回の議事録を確認していただいたが、特にご意見がなければHPにアップしたい。それぞれ自分の発言等もあったかと思うので、見ていただいて明日くらいまでにご連絡いただければ、訂正をする。

委員長： 私も先ほど言ったようにできるだけ今まで調査したものの中で共通認識を持ちながら、その上でアイデアをいただき、骨子を決めていきたい。是非皆さんのお力を借りたい。どうもありがとうございました。

4. 閉会の言葉(副委員長)

大変長時間に渡り、ありがとうございました。今日は早朝から協議会の甲州市の主だった施設の視察と、午後からご議論いただいたわけですが、次の第3回目ではほとんど方向性ができるわけです。また、皆さま方の素晴らしい提案を期待して、本日2回目の策定委員会を閉会とさせていただきます。本当にご苦労様でした。

以上